

# ダンス 地域課題向き合う



就労に向けた自己表現のトレーニングとして、ダンスに取り組む若者たち(京都市東山区・東山青少年活動センター)

創作ダンスを通して地域社会の課題に向き合う「コミュニティーダンス」の取り組みが、京都市内で東山区を中心にじわりと広がりを見せつつある。人間関係の希薄化や若者の生きづらさなどへの「処方箋」として、公共施設などで体験型講座が活発に行われている。(長谷川真一)

## 東山など 体験型講座広がる

床に寝そべり、背筋や手足をゆっくり伸ばして体の緊張を緩める。やがて円形にぐるぐると回ったり、あちこちに散らばったり、日常のしぐさを誇張したり。モチーフとなる動きに沿って、自由にダンスを紡いでいく。

東山青少年活動センター(東山区)が2016年に始めた「じぶんみがきダンス」。年2回開く講座の目的は、引きこもりなど他者との関わりに悩む若者たちの「就労支援」だ。ダンスで他者や社会と接点を持ち、就労の下地となる自己表現やコミュニケーション力の向上を目指す。

**コミュニティーダンス** 英国で1990年代に発展。経済格差や移民問題などの摩擦を乗り越え、地域社会の融和を図る手法として政策的にダンスが導入され、急速に普及した。日本では2000年代半ば以降、各地で取り組みが始まった。

## 生きづらさ抱えた若者ら 表現重ね人と関わり

1〜2月に4日間行った講座には18〜34歳の男性8人が参加した。伏見区の男性(26)は昨夏、事故で体を痛めて仕事を退職。一時は自宅にこもりがちだったが、進路を考えるなかで講座を知った。「人と関わり合うことにポジティブになった気がする」と、笑顔を見せる。

最終日には参加者全員で作り上げたダンスを披露。最後まで逃げずに参加できた「最初は緊張したけれど、自然に笑えるようになった」と晴れやかに話した。講師を務めたダンスユニット「セレノグラフィカ」の隅地葉歩さんは「考えをまとめ、互いの意見を調整しながら作品を積み上げる経験は、仕事や社会生活でもきつと役立つ」と強調する。

同様にコミュニティーダンスの普及に取り組むNPO法人「ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク」(JCDN・中京区)は、東山区の三条学童保育所で子どもを対象にした「こちかぜキッズダンス」を2014年に始めた。

近年はさらに活動の場を広

げ、市内の児童養護施設や母子家庭支援施設、非行少年の立ち直りを支援する京都府警の「少年サポートセンター」でも講座を開く。児童や少年たちが、自身の存在意義を前向きに受け止める「自己肯定感」をダンスを通して育む狙いだ。コーディネーターの神前沙織さんは「言葉を使わず、体一つでできるダンスは誰もが楽しめる、競技スポーツのように勝敗もない。創作を通して、世代や立場を超えた人間関係の形成が期待できる」と効果を語る。

京都芸術センター(中京区)では09〜14年度、コミュニティーダンスのフェスティバルも開催された。その後、参加者の中で中年男性や若い母親たちがグループを結成するなど、広がりをみせている。ダンスが新たなコミュニティーを生み出し、人々の居場所にもなる可能性を秘めている。

